

|             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 氏 名         | 阿 河 敏 之<br>あ がわ とし ゆき   |
| 学 位 の 種 類   | 医 学 博 士                 |
| 学 位 記 番 号   | 論 医 博 第 2 9 号           |
| 学位授与の日付     | 昭 和 37 年 6 月 19 日       |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当 |
| 学 位 論 文 題 目 | 奇形歯、とくに小臼歯彎曲症の形態病理学的研究  |

論文調査委員 (主 査) 教授 鈴 江 懷 教授 岡 本 耕 造 教授 美濃口 玄

### 論 文 内 容 の 要 旨

奇形歯、とくに歯根奇形の一種に彎曲歯と呼称されるものがある。そもそも歯根は一般にその先端部が遠心側に傾斜する通性があるが、これが、根の中央部や頸においてとくに著明に彎曲ないし屈曲を呈することがあり、この場合は歯科病理学的に、とくに、奇形歯として取り扱われているのである。

今回、著者はとくに上下顎小臼歯に現われた彎曲歯の多数例について、肉眼的、レ線的ならびに組織学的の観察を行い、彎曲歯の実態把握と成因の追究に努め、次のような興味ある幾多の知見を収めることができた。

1) 彎曲歯を彎曲方向別的に頰側彎曲、舌側彎曲、近心彎曲、遠心彎曲の4群に大別したが、上下顎とも遠心彎曲をなすものが最も多かった。

2) また、彎曲性状から単純彎曲歯と重複彎曲歯に分類したが、単純彎曲歯は遠心彎曲例に多く、重複彎曲歯は頰、舌側彎曲ならびに近心彎曲例に多くみられた。

3) 彎曲歯の計測値と重量は重複彎曲歯では標準値以下のものが多く、發育の劣勢なことを示すが、単純彎曲歯では根長および重量が標準値より大なるものもかなりみられた。

4) 彎曲部位は上顎小臼歯では歯冠直下の根頸部が多く、そのほとんど重複彎曲を呈し、下顎小臼歯では根の中央付近でゆるやかな彎曲をなすものが多かった。

5) 彎曲角度は単純彎曲歯では  $150.1^{\circ} \sim 180.0^{\circ}$  の弱い彎曲をなすものが多く、重複彎曲歯では  $90.1^{\circ} \sim 150.0^{\circ}$  の強い屈曲を示すものが多かった。

6) 彎曲角度と彎曲部位との関係を見ると、根頸部で彎曲するものに彎曲度の強いものが多く、彎曲部位が根尖に近づくほど総じて彎曲度は弱く、歯の發育の早期に彎曲が生じたものほど彎曲度の強い傾向がみとめられた。

7) 彎曲歯における歯冠各部の發育は、咬頭、辺縁隆線、中心隆線、介在結節などは幽微なものが多く、その傾向は彎曲度の異なるものに著明であった。また彎曲徴、隅角徴は大多数の症例において分明であっ

たが、歯頸線彎曲は不分明なものが半数にみられ、そのほとんどが重複彎曲であった。

8) 彎曲歯の歯冠表面における減形成の所見は重複彎曲歯に顕著なものが多く、単純彎曲歯では一部の例以外はみられず、とりわけ、白斑の歯面における分布上の特異性はみとめられず、歯冠全域にわたり、発現するものが大部分であった。

9) 減形成の発現状況と彎曲部位との関係をみると、彎曲部位が歯冠側によるものほど、減形成が著明に現われており、彎曲の時期が早期であればあるほど、減形成が発現しやすく、かつ高度となることがわかった。

10) レントゲン像による観察から、彎曲部の歯髓腔は狭窄状態を示すものが多く、重複彎曲歯では根尖孔の広大なものが若干例にみられたが、単純彎曲歯ではおおむね正常な根管像を備えていることが判明した。

11) 組織学的に彎曲歯にはエナメル質の灰化不全像が総じて著明にみられ、とくに、重複彎曲歯の歯頸側 1/3 部において顕著であった。また彎曲部の象牙細管の排列、走向は不規則となり、波濤状を呈しているが、単純彎曲歯では幽微であった。

12) 小臼歯彎曲症の成因については、各症例における根の彎曲性状やエナメル質減形成の発現状態などから考察して、外力ないし炎症などの局所的原因にもとづくもので、いわゆる Turner の歯の範疇に属するものと、Wedl の説のように主として顎骨内の空隙の不足にもとづくものの2種類があると思われるのであって、前者にはエナメル質減形成を随伴する重複彎曲歯ないし高度の屈曲歯が該当し、後者には減形成を伴はわない緩徐な単純彎曲歯があてはまると思考する。

## 論文審査の結果の要旨

人類の奇形歯は身体他部の奇形と同じく系統発生学的に発来するもの、病理学的に惹起されるもの、また突然変異などに基づくものなどがあると考えられているが、まだその成因については明確でないものが少なくない。著者が今回研究の資料とした彎曲歯にも、その成因については代表的な2説があり、Tomesの外傷説とWedlの圧迫説とが対立している。

もともと彎曲歯は上顎中切歯、ないし上下顎の小臼歯に時あって遭遇するものであるが、これに関する従来の研究報告を通覧すると症例報告程度のものが多く、多数例を蒐集して精密な調査をとげたものは、1, 2を数えるにすぎない。そこで著者はとくに小臼歯彎曲症の多数例を蒐集して研究し、肉眼的、レ線のおよび組織学的観察を行なって、その実態を把握するとともに、成因の究明に努め、興味ありかつ臨床的にも裨益する成果を収めたのが本報告である。

蒐集例は総数72におよんでいるが、これらを肉眼的には、彎曲方向、各部計測値、根の走行、彎曲部位、推定彎曲時期、彎曲角度、歯冠各部の發育状態、歯冠の表面性状、根の發育程度、またレ線的には根管、根尖孔の大きさ、彎曲部の歯髓腔の性状などにつき検討し、また組織学的検査の結果、小臼歯彎曲症は重複彎曲と単純彎曲との2型があり、著者は前者を第1型、後者を第2型としたのであるが、それらがそれぞれ異なった発生原因によるものであろうことを推定し得たのである。すなわち第1型の重複彎曲症は外傷または炎症などの局所的原因に基づき発来するもので Tomes の外傷説を支持するものであり、第2型

の単純彎曲症は全身性灰化障害などの減形成に基ずく顎骨齒槽空隙の狹窄が原因となって惹起されるもので Wedl 圧迫説に該当するものである。

以上は成因の不明瞭であった彎曲齒につき明確な回答を与えたものであって、単に病理学上興味あるのみならず臨床的にも実益をもたらすものであり、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。